

校異源氏物語・よもぎふ

もしほたれつゝわひ給ひしころをひみやこにもさまゝにおほしなく人おほかりしをさてもわか御身のより所あるはひとかたの思ひこそくるしけなりしか二条のうへなものとやかにてたひの御すみかをもおほつかなからすきこえかよひ給つゝくらゐをさりたまへるかりの御よそひをもたけのこのよのうきふしをときゝにつけてあつかひきこえ給ふになくさめ給けむなかゝそのかすと人にもしられすたちわかれ給ひしほどの御ありさまをもよその事に思ひやり給ふ人ゝのしたの心くたき給たくひおほかりひたちの宮の君はちゝみこのうせ給ひにしなこりに又思ひあつかふ人もなき御身にていみしう心ほそけなりしを思かけぬ御事のいてきてとふらひきこえ給ことたえさりしをいかめしき御いきをいにこそことにもあらずはかなきほどの御なさけはかりとおほしたりしかとまちうけ給ふたものせはきにおほ空のほしのひかりをたらいの水にうつしたる心ちしてすくし給しほとにかゝるよのさはきいてきてなへてのようくをほしみたれしまきれにわさとふかゝらぬかたの心さしはうちわすれたるやうにてとをくおはしましにしのちふりはへてしもえたつねきこえ給はすそのなこりにしはゝなくゝもすくし給しをとし月ふるまゝにあはれにさひしき御ありさまなりふるき女はらなとはいてやいとくちをしき御すくせなりけりおほえす神ほとけのあらはれたまへらむやうなりし御心はへにかゝるよすかも人はいておはするものなりけりとありかたうみたてまつりしをおほかたの世の事といひながらまたたのむかたなき御ありさまこそかなしけれとつふやきなくさるかたにありつきたりしあなたのとしころはいふかひなきさひしさにめなれてすくし給をなかゝすこしよつきてならひにける年月にいとたへかたく思なけくへしすこしもさてありぬへき人ゝはをのつからまいりつきてありしをみなつきゝにしたかひていきちりぬ女はらのいのちたえぬもありて月日にしたかひてはかみしも人かすすくなくなりゆくもとよりあれたりし宮のうちいとゝきつねのみかになりてうとましうけとをき木たちにくろうのこゑをあさゆふにみゝならしつゝ人けにこそさやうのものもせかれてかけかくしけれこたまなとけしからぬ物ともところえてやうゝかたちをあらはしものわひしき事のみかすしら

ぬにまれ／＼のこりてさふらふ人は猶いとわりなしこのす両とものおもしろき
いゑつくりこのむかこの宮のこたちを心につけてはなち給はせてむやとほとり
につきてあむなひし申さするをさやうにせさせ給ひていかうものをそろしか
らぬ御すまひにおほしうつろはなむたちとまりさふらふ人もいとたへかたしな
ときこゆれとあないみしや人のき、おもはむこともありいけるよにしかなこり
なきわさいか、せむかくおそろしけにあればぬれとおやの御かけとまりたる
心ちするふるきすみかと思ふになくさみてこそあれとうちなきつ、おほしもか
けす御てうと、もをいとこたいになれたるかむかしやうにてうるはしきをなま
もの、ゆへしらむと思へる人さるものえうしてわさとそのひとかの人にせさせ
給へるとたつねき、てあんないするものをのつからかゝるまつしきあたりとおも
ひあなつりていひくるをれいの女はらいか、はせんそこそはよのつねの事とて
とりまきはしつ、めにちかきけふあすのみくるしきをつくろはんとするとき
もあるをいみしういさめ給ひてみよとおもひ給ひてこそしおかせ給ひけめなど
てかかろ／＼しき人のいゑのかさりとほなさむなき人の御ほいたかはむかあは
れなること、のたまひてさるわさはせさせ給はすはかなきことにてもみとふら
ひきこゆる人はなき御身なりた、御せうとのせむしの君はかりそまれにも京に
いてたまふ時はさしのそき給へとそれによになきふるめき人にておなしきほう
しといふなかにもたつきなくこのよをはなれたるひしりにももし給てしけき草
よもきをたにかきはらはむものとも思ひより給はすかゝるまゝにあさちはには
のおも、みえすしけきよもきはのきをあらそひておひのほるむくらはにしむ
かしのみかとをとちこめたるそたのもしけれとくつれかちなるめくりのかきを
むまうしなどのふみならしたるみちにてはる夏になれば、なちかうあけまきの
心さへそめさましき八月野わきあらかりしとしらうとも、たうれふしものや
とものはかなきいたふきなりしなどはほねのみわつかにのこりてたちとまるけ
すたになしけふりたえてあはれにいみしきことおほかりぬす人などいふひたふ
る心あるものも思やりのさひしければにやこの宮をはふようのものにふみすき
てよりこさりければかくいみしきのらやふなれともさすかにしんてむのうちは
かりはありし御しつらひかはらすつや、かにかいはきなどする人もなしちりは
つもれとまきる、ことなきうるはしき御すまひにてあかしくらし給ふはかなき
ふるうたものかたりなとやうのすさひ事にてこそつれ／＼をもまきはしか、
るすまひをもおもひなくさむるわさなめれさやうのことにも心をそくものした
まふわさとこのましからねとをのつからまたいそくことなき程はおなし心なる

ふみかよはしなうちしてこそわかき人はきくきにつけても心をなくさめたまふへけれとおやのもてかしつき給ひし御心をきてのまゝに世中をつゝましきものにおほしてまれにもことかよひ給ふへき御あたりをもさらになれたまはすふりにたるみつしあけてからもりはこやのとしかくやひめのものかたりのゑにかきたるをそとき／＼のまさくりものにしたまふゝるうたとてもおかしきやうにえりいたいをもよみ人をもあらはし心えたるこそみところもありけれうるはしきかむやかみゝちのくにかみなどのふくためるにふることゝものめなれたるなどとはいとすさましけなるをせめてなかめ給ふおり／＼はひきひろけ給ふいまの世の人のすめるきやうゝちよみをこなひなといふことはいとはつかしくし給てみたてまつる人もなけれとすゝなとゝりよせ給はすかやうにうるはしくそのし給ける侍従などいひし御めのとこのみこそとしころあくかれはてぬものにてさふらひつれとかよひまいりし齋院うせ給ひなとしていとたえかたく心ほそきにこのひめきみのはゝきたのかたのはらからよにおちふれてす両のきたのかたになり給へるありけりむすめともかしつきてよろしきわか人ともゝむけにしらぬところよりはおやともゝまうてかよひしをと思てとき／＼いきかよふこのひめ君はかく人うとき御くせなれはむつましくもいひかよひ給はすのをれをはおとしめ給ておもてふせにおほしたりしかはひめ君の御ありさまの心くるしけなるもえとふらひきこえずなとなまにくけなることはともいひきかせつゝとき／＼きこえけりもとよりありつきたるさやうのなみ／＼の人はなか／＼よき人のまねに心をつくろひ思ひあかるもおほかるをやむことなきすちなからもかうまておつへきすくせありければにや心すこしなを／＼しき御をはにそありけるわかかくおとりのさまにてあなつらはしくおもはれたりしをいかてかゝるよのすゑに此きみをわかむすめもののつかひ人になしてしかな心はせなどのふるひたるかたこそあれいとうしろやすきうしろみならむと思てとき／＼こゝにわたらせ給て御ことのねもうけたまはらまほしかる人なむはへるときこえけり此侍従もつねにいひもよをせと人にいとむ心にはあらてたゝこちたき御ものつゝみなれはさもむつひ給はぬをねたしとなむおもひけるかゝるほとにかのいへあるし大にゝなりぬむすめともあるへきさまにみをきてくたりなむとすこの君を猶もいさなはむの心ふかくてはるかにかくまりなむとするに心ほそき御ありさまのつねにしもとふらひきこえねとちかきたのみはへりつるほとこそあれいとはれにうしろめたなくなむなとことよかるをさらにうけひきたまはねはあなにくこと／＼しや心ひとつにおほしあかるともさるやふはらにとしへ給ふ人を大

将とのもやむことなくしも思ひきこえたまはしなとゑんしうけひけりさるほと
にけに世中にゆるされ給ひてみやこにかへり給と雨のしたのよろこひにてたち
さはく我もいかて人よりさきにふかき心さを御らむせられんとのみ思ひきを
ふおとこ女につけてたかきをもくたれるをも人の心はへをみたまふにあはれに
おほししることさま／＼なりかやうにあはたゝしきほとにさらにおもひいて給
ふけしきみえてつき日へぬいまはかきなりけりとしころあらぬさまなる御さ
まをかなしういみしきことを思ひなからもゝえいつるはるにあひ給はなむとね
しわたりつれとたひしかはらなとまてよろこひおもふなる御くらゐあらたまり
なとするをよそにのみきくへきなりけりかなしかりしおりのうれはしさはたゝ
わか身ひとつのためになれるとおほえしかひなきよかなと心くたけてつらくか
なしければ人しれすねをのみなき給ふ大二のきたのかたされはよまさにかくた
つきなく人わろき御ありさまをかすまへ給ふ人はありなむや仏ひしりもつまか
ろきをこそみちひきよくしたまふなれかゝる御ありさまにてたけくよをおほし
宮うへなどのおはせしときのまゝにならひ給へる御心をこりのいとをしきこと
ゝいとゝおこかましけに思て猶おもほしたちねよのうきときはみえぬ山ちをこ
そはたつぬなれゐ中などはむつかしきものとおほしやるらめとひたふるに人わ
ろけにはよもゝてなしきこえしなといとことよくいへはむけにくむしにたる女
はらさなひき給はなむたけきこともあるましき御身をいかにおほしてかくた
てたる御心ならむときつふやく侍従もかの大二のおひたつ人かたらひつき
てとゝむへくもあらさりければ心よりほかにいてたちてみたてまつりをかんか
いと心くるしきをとてそゝのかしきこゆれと猶かくかけはなれてひさしうなり
給ひぬる人にたのみをかけ給御心のうちにさりともありへてもおほしいつるつ
いてあらしやはあはれに心ふかき契をしたまひしにわか身はうくてかくわすら
れたるにこそあれかせのつてにてもわれかくいみしきありさまをきゝつけたま
はゝかならずとふらひいてたまひてんと年ころおほしければおほかたの御いへ
るもありしよりけにあさましけれとわか心もてはかなき御てうとゝもなともと
りうしなはせ給はす心つよくおなしさまにてねんしすこし給ふなりけりねなき
かちにいとゝおほししつみたるはたゝやま人のあかきこのみひとつをかほには
なたぬとみえ給ふ御そはめなどはおほろけの人のみたてまつりゆるすへきにも
あらずかしくはしくはきこえしいとをしうものいひさかなきやうなり冬になり
ゆくまゝにいとゝかきつかむかたなくかなしけになかめすこし給ふかの殿には
こ院の御れうの御八講世中ゆすりてしたまふことにそうなどはなへてのはめさ

すさえすくれをこなひにしみたうときかきをえらせ給ければこのせむしの君
まいりたまへりけりかへりさまにたちより給てしか、権大納言殿の御八講に
まいりて侍へるなりいとかしこういける上とのかさりにおとらすいかめしうお
もしろきこと、ものかきりをなむし給つる仏ほさつのへんけの身にこそものし
給めれいつゝのにこりふかきよになとてむまれ給けむといひてやかていて給ひ
ぬことすくなに世の人に、ぬ御あはひにてかひなき世のものかたりをたにえき
こえあはせ給はすさてもかはかりつたなき身のありさまをあはれにおほつかな
くてすくし給は心うの仏菩薩やとつらうおほゆるをけにかきりなめりとやう
く思なり給に大貳のきたのかたにはかにきたりれいさしもむつひぬをさそ
ひたてむの心にてたてまつるへき御そうそくなとてうしてよき車にのりておも
もちけしきほこりかにも思ひなけるさましてゆくりもなくはしりきてかと
あけさするより人わろくさひしきことかきりもなしひたりみきのともみなよろ
ほひたうれにければをのこともたすけてとかくあけさはいづれかこのさひし
きやとにもかならずわけたるあとあなるみつのみちとたとるわつかにみなみを
もてのかうしあけたるまによせたれはいと、はしたなしとおほしたれとあさま
しうすゝけたるき丁さしいてゝ侍従いてきたりかたちなとをとろへにけりとし
ころゐたうつゐえたれと猶ものきよけによしあるさましてかたしけなくともと
りかへつへくみゆいてたちなむことを思ひながら心くるしきありさまのみすて
たてまつりかたきをしゝうのむかへになむまゐりきたる心うくおほしへたてゝ
御身つからこそあからさまにもわたらせ給はねこの人をたにゆるさせ給へとて
なむなどかうあはれけるさまにはとてうちもなくへきそかしされとゆくみち
に心をやりていと心ちよけなりこ宮おはせしときをのれをおもてふせなりと
おほしすてたりしかはうとくしきやうになりそめにしかとゝしころもなにか
はやむことなきさまにおほしあかり大将殿などおはしましかよふ御すくせのほ
とをかたしけなく思ひ給へられしかはなむゝつひきこえせんもはゝかること
おほくてすくしはむへるを世中のかくさためもなかりければかすならぬ身はな
かく心やすく侍ものなりけりをよひなくみたてまつりし御ありさまのいとか
なしく心くるしきをちかきほとはをこたるおりものとかにたのもしくなむはへ
りけるをかくはるかにまかりなむとすれはうしろめたくあはれになむおほえ給
ふなとかたらへと心とけてもいらへ給はすいとうれしきことなれとよににぬさ
まにてなにかはかうなからこそくちもうせめとなむ思はへるとのみのたまへは
けにしかなむおほさるへけれといける身をすてかくむくつけきすまひするたく

ひははへらすやあらむ大將殿のつくりみかき給はむにこそはひきかへたまのう
てなにもなりかへらめとはたのもしうははへれとたゝいまは式部卿の宮の御む
すめよりほかに心わけ給ふかたもなかなりむかしよりすきくしき御心にてな
をさりにかよひ給ひけるところくみなおほしはなれにたなりましてかうもの
はかなきさまにてやふはらにすくし給へる人をは心きよくわれをたのみ給へる
ありさまとたつねきこえたまふ事いとかたくなむあるへきなといひしらするを
けにとおほすもいとかなくつくくとなき給されとうこくへうもあらねは
よろつにいひわつらひくらしてさらは侍従をたにと日のくるゝまゝにいそけは
心あはたゝしくてなくくさらはまつけふはかうせめ給ふをくりはかりにまう
てはへらむかのきこえ給ふもことはりなりまたおほしわつらふもさることには
へれは中にみたまふるも心くるしくなむとしのひてきこゆこの人さへうちすて
ゝむとするをうらめしうもあはれにもおほせといひとゝむへきかたもなくてい
とゝねをのみたけきことにてもなし給ふかたみにそへ給ふへきみなれ衣もしほ
なれたれはとしへぬるしるしみせ給ふへきものなくてわか御くしのおちたりけ
るをとりあつめてかつらにしたまへるか九尺よはかりにていときよらなるをお
かしけなるはこにいれてむかしのくのかうのいとかうはしきひとつほくして
給ふ

たゆましきすちをたのみし玉かつら思ひのほかにかけはなれぬるこまゝの
ゝ給ひをきしこともありしかはかひなき身なりともみはてゝむどこそ思ひつれ
うちすてらるゝもことはりなれとたれにみゆつりてかとうらめしうなむとてい
みしうない給ふこの人もゝのもきこえやらすまゝのゆいこむはさらにもきこえ
させすとしころのしのひかたきよのうさをすくしはへりつるにかくおほえぬみ
ちにいさなはれてはるかにまかりあくかるゝことゝて

玉かつらたえてもやましゆくみちのたむけの神もかけてちかはむいのちこ
そしりはへらねなといふにいつらくらうなりぬとつふやかれて心も空にてひき
いつれはかへりみのみせられけるとしころわひとつゝもゆきはなれさりつる人の
かくわかれぬることをいと心ほそうおほすによにもちゐらるましきおい人さへ
ゐてやことはりそいかてかたちとまり給はむわれらもえこそねむしはつましけ
れとをのかみゝにつけたるたよりとも思いてゝとまるましよう思へるを人わろく
きゝおはすしもつきはかりになれはゆきあられかちにてほかにはきゆるまもあ
るをあさひゆふひをふせくよもきむくらのかけにふかうつもりてこしのしら山
思ひやらるゝ雪のうちにいっているしも人たになくてつれくとなかめ給ふはか

なきことをきこえなくさめなきみわらひみまきはしつる人さへなくてよるもちりかましき御丁のうちもかたはらさひしくものかなしくおほさるかのどにはめつらしひとにいと、ものさはかしき御ありさまにていとやむことなくおほされぬところ／＼にはわさともえをとつれ給はすましてその人はまたよにおおはすらむとはかりおほしいつるおりもあれとたつね給ふへき御心さしもいそかてありふるにとしかはりぬう月はかりに花ちるさと思いてきこえ給ひてしのひてたいのうへに御いとまきこえていて給ふひろふりつるなこりの雨いますこしそゝきておかしきほどに月さしいてたりむかしの御ありきおほしいてられてえんなる程のゆふつくよにみちのほとよろつの事おほしいてゝおはするにかたもなくあれたるいへのこたちしけくもりのやうなるをすき給ふおほきなる松にふちのさきかゝりてつきかけになよひたるかせにつきてさとにほふかなつかしくそこはかとなきかほりなりたちはなにかはりておかしければさしいて給へるにやなきもいたうしたりてついひちもさはらはみたれふしたりみし心ちするこたちかなとおほすはゝやうこの宮なりけりいとあはれにてをしとゝめさせ給れいのこれみつはかゝる御しのひありきにくれねはさふらひけりめしよせてゝはひたちの宮そかしなしか侍ときこゆこゝにありし人はまたやなかむらんとふらふへきをわさどものせむもところせしかゝるついてにிரてせうこそよよくたつね入てをうちいてよ人たかへしてはおこならむとの給こゝにはいとゝなかめまさるころにてつく／＼とおはしけるにひるねのゆめにこ宮のみえ給ひければさめていとなりかなしくおほしてもりぬれたるひさしのはしつかたをしのこはせてゝ、かしこのおましひきつくろはせなとしつゝ、れいならすよつき給ひて

なき人をこふるたもとのひまなきにあれたるのきのしつくさへそふも心くるしきほどになむありけるこれみつ入てめくる／＼人のをとするかたとみるにいさゝかの人けもせずされはこそゆきゝのみにみいるれと人すみけもなきものをと思てかへりまいる程に月あかくさしいてたるにみれはかうしふたまはかりあけてすたれうこくけしきなりわつかにみつけたる心ちおそろしくさへおほゆれとよりてこわつくれはいとものふりたるこゑにてまつしはふきをさきにたてゝ、かれはたれそなに人そとゝふなのりして侍従の君ときこえし人にたいめん給はらむといふそれはほかになんものし給ふされとおほしわくましき女なむ侍といふこゑいたうねひすきたれときゝしおぬ人ときゝしりたりうちには思ひもよらすかりきぬすかたなるおとしのひやかにもてなしなこやかなればみな

らはすなりにけるめにてもしきつねなどのへんけにやとおほゆれとちかうより
てたしかなむうけ給はらまほしきかはらぬ御ありさまならはたつねきこえさ
せ給へき御心さしもたえすなむおはしますめるかしこよひもゆきすきかてにと
まらせ給へるをいか、きこえさせむうしろやすくをといへは女ともうちわらひ
てかはらせ給御ありさまならはかゝるあさちはらをうつろひ給はては、へり
なんやたゝをしはかりてきこえさせ給へかしとへたる人の心にもたくひあら
しとのみめつらかなるよをこそはみたまつりすこしはへるとやゝくつしいて
ゝとはすかたりもしつへきかむつかしければよしゝまつかくなむきこえさせ
んとてまいりぬなとかいとひさしかりつるいかにそむかしのあともみえぬよも
きのしけさかなとの給へはしかゝなむたとりよりてはへりつる侍従かをはの
少将とゐひはへりしお人なんかはらぬこゑにてはへりつるとありさまきこゆ
いみしうあはれにかゝるしけきなかになに心ちしてすくし給ふらむいまゝてと
はさりけるよとわか御心のなさけなさもおほししるいかゝすへきかゝるしの
ひあるきもかたかるへきをかゝるついてならてはえたちよらしかはらぬありさ
まならはけにさこそはあらめとをしはからるゝ人さまになむとはのたまひなか
らふといり給はむ事猶つゝましうおほさるゆへある御せうそこいときこえま
ほしけれとみたまひしほとのかちをそさもまたかはらすは御つかひのたちわつ
らはむもいとをしうおほしとゝめつこれみつもさらにえわけさせ給ふましきよ
もきの露けさになむはへる露すこしはらはせてなむいらせ給ふへきときこゆれ
は

たつねてもわれこそとはめみちもなくふかきよもきのもとの心をとひとり
こちて猶をり給へは御さきの露をむまのむちしてはらひつゝいれたてまつるあ
まそゝきも猶秋のしくれめきてうちこそけは御かささふらふけにこのした露は
あめにまさりてときこゆ御さしぬきのすそはいたうそをちぬめりむかしたにあ
るかなきかなりし中門なとましてかたもなくなりていり給ふにつけてもいとむ
とくなるをたちましりみる人なきそ心やすかりけるひめ君はさりとともとまちす
くし給へる心もしるくうれしけれといとはつかしき御ありさまにてたいめむせ
んもいとつゝましくおほしたり大ニのきたのかたのたてまつりをきし御そとも
をも心ゆかすおほされしゆかりにみいれたまはさりけるをこの人ゝのかうの
御からひつにいれたりけるかいとなつかしきかしたるをたてまつりければいか
ゝはせむにきかへ給ひてかのすゝけたる御き丁ひきよせておはすいり給てとし
ころのへたてにも心はかりはかはらすなん思ひやりきこえつるをさしもおとろ

かい給はぬうらめしさにいまゝて心みきこえつるをすぎならぬこたちのしるさにえすきてなむまけきこえにけるとてかたひらをすこしかきやり給へれはれいのいとつゝましけにとみにもいらへきこえ給はすかくはかりわけいり給へるかあさからぬに思おこしてそほのかにきこえて給けるかゝる草かくれにすくし給ひけるとし月のあはれもをろかならすまたかはらぬ心ならひに人の御心のうちもたとりしらすなからわけいりはへりつる露けさなどをいかゝおほすとしころのをこたりはたなへてのよにおほしゆるすらむいまよりのちの御心になはさらむなんいひしにたかうつみもおうへきなどさしもおほされぬこともなさけなさけしうきこえなし給ふこともあへめりたちとゝまり給はむもところのさまよりはしめまはゆき御ありさまなれはつき／＼しうのたまひすくしていて給ひなむとすひきうえしならねとまつのこたかくなりにけるとし月のほともあはれに夢のやうなる御身のありさまもおほしつゝけらる

ふちなみのうちすきかたくみえつるはまつこそやとのしるしなりけれかそふれはこよなうつもりぬらむかしみやこにかはりにけることのおほかりけるもさま／＼あはれになむいまのとかにそひなのわかれにおとろへしよのものかたりもきこえつくすへきとしへたまへらむ春秋のくらしかたさなどもたれにかはうれへ給はむとうらもなくおほゆるもかつはあやしうなむなときこえ給へはとしをへてまつしるしなきわかやとを花のたよりにすきぬはかりかとしの

ひやかにうちみしろき給へるけはひも袖のかもむかしよりはねひまさり給へるにやとおほさる月入かたになりてにしのつまとのあきたるよりさはるへきわたとのたつやもなくのきのつまものこりなければいと花やかにさしいりたればあたりあたりみゆるにむかしにかはらぬ御しつらひのさまなと忍草にやつれたるうへのみるめよりはみやひかにみゆるをむかしものかたりに塔こほちたる人もありけるをおほしあはするにおなしさまにてとしふりにけるもあはれなりひたふるにものつゝみしたるけはひのさすかにあてやかなるも心にくゝおほされてさるかたにてわすれしと心くるしく思ひしをとしころさま／＼のものおもひにほれ／＼しくてへたてつるほとつらしとおもはれつらむといとをしくおほすかの花ちるさともあさやかにいまめかしうなどはゝなやき給はぬところにて御めうつしこよなからぬにとかおほうかくれにけりまつりこけいなどのほと御いそぎとともにことつけて人のたてまつりたるもの色／＼におほかるをさるへきかきり御心くはへ給ふ中にもこの宮にはこまやかにおほしよりてむつましき人／＼におほせ事給ひしもへともなとつかはしてよもきはらせめくりのみくるしき

にいたかきといふものうちかためつくろはせ給ふかうたつねいて給へるとき、
つたへんにつけてもわか御ため、むほくなければわたり給事はなし御ふみいと
こまやかにかき給ひて二条院ちかきところをつくらせ給ふをそこになむわたし
たてまつるへきよろしきわらはへなともとめさふらはせたまへなと人／＼のう
へまておほしやりつゝとふらひきこえ給へはかくあやしきよもきのもとにはを
きところなきまで女はらも空をあふきてなむそなたにむきてよろこひきこえけ
るなけの御すさひにてもをしなへたるよのつねの人をはめと、めみみたて給は
す世にすこしこれはおもほへこゝちにとまるふしあるあたりをたつねより給
ふものと人のしりたるにかくひきたかへなに事もなのめにたにあらぬ御ありさ
まをものめかしいて給ふはいかなりける御心にかありけむこれもむかしのちき
りなめりかしいまはかきりとあなつりはて、さま／＼にまよひちりあかれしう
へしもの人／＼われも／＼まいらむとあらそひいつる人もあり心はへなどはた
むもれいたきまでよくおはする御ありさまに心やすくならひてことなることな
きなます両なとやうのいへにある人はならはすはしたなき心ちするもありてう
ちつけの心みえにまいりかへり君はいにしへにもまさりたる御いきをいのほと
にてものゝおもひやりもましてそひ給ひにければこまやかにおほしをきてたる
ににほひいて、宮のうちやう／＼人めみえきくさのはもたゝすこくあはれにみ
えなされしをやり水かきはらひせむさいのものとたちもすゝしうしなしなどして
ことなるおほえなきしもけいしのことにつかへまほしきはかく御心とゝめてお
ほさるゝ事なめりとみとりて御けしき給はりつゝついせうしつかうまつるふた
とせはかりこのふる宮になかめ給てひんかしの院といふところになむ後はわた
したてまつり給けるたいめんし給ふ事などとはいとかたけれとちかきしめのほと
にておほかたにもわたり給にさしのそきなどし給ひつゝいとあなつらはしけに
もてなしきこえたまはすかの大二のきたのかたのほりておとろきおもへるさま
侍従かうれしきものゝいましはしまちきこえさりける心あさゝをはつかしう思
へるほなどをいますすこしとはすかたりもせましけれといとかしらいたううる
さくものうけれはなむいまゝたもついてあらむおりに思いてゝきこゆへきとそ